

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

機動戦士ガンダムEDEN

【作者名】

ナッツガン

【あらすじ】

三年前に別の世界に来てしまったジン

そんな彼と共に同じ世界から来てしまった人間は200人にも及ぶ

そんな彼らと共に軍人として生きていく道を選んだ彼は、ガンダムと共に二つの世界の命運をかけた戦いに投じる事になる

そして色々な人たちと関わる事で彼も少しずつ進化していく

ジンと彼にかかわる人たちの物語

新たな場所へ

宙に浮きながら俺は天井を真直ぐ見つめていた。

周囲に居る人間は全員がノーマルスーツを着ていて、もちろん俺もだ。

俺の目の前にある窓にはモビルスーツが7機程置かれている。

俺の隣に座っている奴も、緊張している。

周囲に居る人間も同じようで、緊張している事が良くわかる。

「ジン、緊張しないのか？」

俺の後ろに座っている親友のリユウもどこか緊張がうかがえる。

「別に…俺には関係ないし」

ここに居る人間はみんな国連軍に入隊する為にいる、最終試験は宇宙で実際にモビルスーツを動かす事だ。

と言っても俺は、もうすでに受かっているようなものなので試験のくそもない。

「いいよな…優秀な人間は」

「お前がただ単に、バカなだけだろ？」

「ガンダムとかいうモビルスーツを与えられるんだろ？」

「らしいな」

俺は既に入隊が決まっっていて、配属は特務隊らしい。

卒業後に月のグラナダでガンダムアクセルを受ける予定になって
いる。

「特務隊配属予定者の5人は早く来い！」

ドアの奥から出てきた人は、俺達に向かって指示を出した。

俺を含めた5人は部屋を出ると、モビルスーツに乗り込んだ。

手慣れた手つきで俺は、モビルスーツを動かす。

『一番から順序良く出ていけ！』

通信機の奥から試験管が大きな声で叫ぶ。

俺が一番なので先にカタパルトデッキに乗る。

「行きます」

スキーの要領で俺は外に出ると、途中で止まり他の奴が出てくるのを待った。

5人が出るのを確認すると、試験官のモビルスーツが出てくる。

『一番から奥に見える的にペイント弾を当ててこい！モビルスーツに当たったペイント弾一つにつき一点減点だ』

俺は“Gコア”の機動を確認すると、試験宙域に向かっていく。

試験宙域に入ると、的に付いている銃からペイント弾が出てくる。

俺は弾を確実に回避すると、的に向かって銃を撃つ。

「1 2 3」

後ろに大きく移動すると、左にある的に向かって二発撃つ。

「4 5」

後的には5個であり、的に向かって機体を走らせる。

弾を避けて行きながら、的に弾が当たって行く。

すべての的に当たると、試験官が大きな声で指示を出す。

『試験終了！船に戻れ！』

「了解」

機体を船に向けると、俺は3年前の事を思い出していた。

3年前に俺達はこの世界に飛ばされた。

ここか何処かは分からないが、俺達の生きていた地球とは違った。

此処は西暦ではなくED暦と言って、モビルスーツが発展している。

俺達はこの世界で生きていく術が無く、俺達は仕方が無いように士官学校に入隊した。

ちなみにこの世界に来たのは俺を含めて200人ちょうどである。

すべての移転者がこのコロニーに居るわけではない。

半分は地球に居て、今まさに試験を受けているはずだ。

俺達は元の星に戻る事は出来るのかは分からない。

それでも戦うしかない。

生きていくために…

試験が無事終わると、俺はさっさと船を下りて学校に戻った。しかし、その途中で俺は不運にもリュウに見つかってしまった。

「今から制服をもらいに行くだろ？」

「まあな……」

リュウは俺と同じく移転者だ、この世界に来て初めて会ったのがこいつだった。

別に悪い奴ではない、むしろ良い奴だろう。

しかし、今は少し機嫌が悪かった。

「まだ怒ってるのか？」

「当たり前だ」

実は試験が無事に終わったかと思うと、的の二つにエラーが見つかり実弾を放出したのだ。

俺は何とか攻撃を回避すると、ビームサーベルで的を切り裂いた。後少し間違っていたら死んでいた。

「教官も誤ったんだし」

「そう言う問題じゃない！」

そつやり取りをしていると、服屋の前に俺達は立っていた。

俺達は既に遅れていたらしく、服屋の前には既に行列が出来ていた。

「これ全員今年の卒業者？」

「らしいな」

行列の最後に並ぶと、俺達は適当な雑談をして待っていた。

「赤いカードが特務隊の服だろ？」

「そうだけど……」

俺は手元を持っているカードを見つめている。

カードの色は赤色だ。

「黄色が普通兵だろ？青が通信兵で、緑が整備兵だったよな？」

「お前は今頃そんな事を確認してどうするんだ？」

ちなみにリュウは黄色のカードを持っている。

リュウは服屋の方をただ見つめている。

「だったらあいつは一般兵だろ？」

「…!!!」

服屋から出てきた女(?)は身長だけでも2メートルあり、横幅もとても大きい。

体重だけでも2キロはありそうだ。

「モビルスーツに入るのかな?」

「だから…一般兵になっているんだろけど」

怖い…

とっつても怖い…

顔も化粧で埋め尽くしているのに、妖怪にも見える。

店の中に入ると、ちよつとずつ進んで行く。

「もつすぐで買えるな」

「長かったな」

「でもさ、そんなに早くに服を買える物なのか?一般兵ならともかく、特務隊は年に3人程度だろ?」

「確かそのはずだ」

「だったら…」

「簡単に言えば、服はすべてのサイズが全て整っている」

「なるほど」

そんな事を話していると、ようやく制服を買うことが出来る。

リュウが先にカードを出すと、奥の方から灰色の制服が出てくる。

俺も隣のカウンターでカードを出すと、奥の方から特務隊用の青色の制服が出てくる。

「あれって特務隊だろ?」

「じゃああいつが成績優秀のジン・ライ「リュウ」?」

「ガンダムを託されるっていう」

周囲の人間はみんなしてこそこそ話している。

俺の存在は学校みんなに届いているようだ。

俺は服を持つと、さっさと店を後にした。

「しかし、人気者だな?」

「面倒なだけだよ…」

寮への道を歩いていると、町にある大きな画面からニュースが流れ

る。

そこには地球の太平洋で、ベア軍との戦いが放送されていた。国連軍が何とか勝利を得たらしい。

「結局さ…ベアって何？」

「お前は…」

ため息を吐きながら答えてやることにした。

「ベアはコンピュータ名だ。そのスーパーコンピュータがこの世界を救うのに叩き出したのが、人類の半数を抹殺する事だった。それに賛成したのが、ベア軍だ」

「賛成したのって、世界にある国の半分だけ？」

「ああ、だからこそ俺達は戦うんだろ？」

ちなみに国連軍に加担しているのは多くいて、連邦や連合もそれに入っている。

しかし、モビルスーツを開発しているのは、国連軍とベア軍だけだ。リュウに戻ると俺はさっさと部屋に戻って、ベットにダイブした。

学校では卒業式の為に何人者人間が準備をしている。

俺はそれを横目に、特務隊の制服を着用している。

周囲の人間が、俺の方をちらちら見ているのが分かってしまう。

「俺が歩くだけで、ちょっとした騒ぎだな」

リュウも朝から呼び出されていて、俺は少し暇になっている。

自分の教室に向かうと、リュウが自分の席に座っていた。

「どっしたんだっ？」

「疲れた…」

かなり参っているリュウもかなり珍しい。

教室の一人また一人と戻ってくる、その様子を窺っていると先生が教室に入って来た。

「作業が終わったものから、体育館に行け！」

俺はリュウを連れて体育館に移動すると、体育館ではすでに半数の生徒が座っている。

俺は自分の席に座ると、卒業式が始まるのを待った。

そして、卒業式が始まった。

最後に全校生徒での校歌を歌うと、無事俺達は卒業していく。体育館を出ると、自由解散になった。

「じゃあなー」

「またどこかで」

会えるか分からないが、少なくともリュウが配属する隊は安全なはずだ。

俺は学校の校門に急ぐと、学校の前で兵が1人待っていた。

「港まで案内いたしますー」

車に乗ると、港に移動していく。

船に乗ると、船は月に向かって移動していく。

窓に写っている宇宙はどこか俺を安心させる。

宇宙の向こうで少し輝くと、それが戦禍だと気づくのは少し後になってからだ。

「懐かしいと感じるのは、なんでだろう」

この世界に来るまでは、俺は宇宙に来たことが無い。

俺の世界には宇宙に上がる技術はあっても、生活することは無い。

「懐かしい…か」

窓の向こうに月面基地である、グラナダが見えてきた。

船の中に居る人間はみんな軍人だ。

そのほとんどが、士官であることが分かる。

「ガンダム…」

手元にある資料にはアクセルガンダムと書かれていた。

アクセルガンダムは、エンジンである“Gコア”を使った最新鋭機である。

“Gコア”は地球圏内で、見つかった石からエネルギーが放出されていたを切っ掛けで、見つかったエンジンだ。

エネルギーは永遠であるが、それだけに扱いが難しい石だ。

量産機はエネルギーの7割が抑えられている。

このアクセルガンダムは、エネルギーの7割を使う事が出来る。
その反面、通常の兵が使うのは難しい。

「もうすぐか」

グラナダはもうすぐだ。

グラナダに着くと、開発局に移動する。

開発局に入ると、眼鏡を掛けた美女が走ってきた。

「ジン！久しぶりね？」

「お久しぶりです！メアリーさん」

この人はメアリーであり、アクセルガンダムを作った本人だ。

そしてガンダムパイロットに俺を選抜した本人。

「いっちょよ」

メアリーさんの後に付いて行くと、大きな格納庫にたどり着いた。

明かりが付くと、そこにはガンダムフェイスと言われている機体が出てくる。

機体の色は胴体は青と白で出来ていて、背中のバックパックも青で出来ている。

バックパックは加速の為に羽が付いており、展開するときには二枚羽になるはずだ。

右手にビームライフルが、左手には盾がついている。

「これをあなたにあげる」

新しい仲間

“Gコア” 内蔵型のエンジンは大気圏中でも飛ぶことが出来る。
“Gコア” には謎の浮遊力があり、大気圏内でも高速で移動することが出来る。

しかし、この性能を全力で引き出すにはパイロットには無理だ。性能が高すぎてパイロットと釣り合わない。

その為、通常のMSは性能を抑えている。

元々“Gコア”は大気圏内で見つけた謎の石だ。

今ではこれをどうやって増やすかを模索している。

そしてアクセルガンダムは性能を大きく上げた機体だ。

しかし、アクセルガンダムはこれからの機体の為に作られた期待だった。

俺はそのアクセルガンダムを使って、性能を試す為に乗っている。

アクセルガンダムで宇宙を進んで行く、本来なら友軍が来ているはずだったが、ガンダムを保管していた基地には戦艦が現れなかった。理由は分からないが、俺は待つてなどいられなかった。

その為俺はガンダムを使って戦艦に向かっていった。

戦艦が来るはずの航路をそのまま逆走していると、目の前に戦闘の光が見えてくる。

ガンダムのスピードを速めると、一隻の戦艦がベア軍のモビルスーツ群に囲まれていた。

「足止めを喰らっていたか」

モビルスーツ群に突っ込んで行くと、ビームライフルを使ってベア軍MSをけん制する。

ベア軍MSは俺の存在に気づいたようで、俺に向かって走ってきた。
た。

俺はビームライフルで敵MSを二機撃墜していく。

「こちらアクセルガンダムパイロットのジーンです！応答願います！」

『こちら艦長のマリナ・ラスティーです。来てくれたのですか？』

「はい！これより参戦します」

そう言ってみせると俺は敵MSを真つ二つにしてゆく。

そうしているとき、国連軍量産機の隊長機であるジムが寄ってきた。

『こちら宇宙第02部隊長のレムネー・ゴウだ！』

「ジン・ライゴウです！」

『すまないな、本来はお前を回収する立場なのに俺達が逆に助けられるよ』

「それより、こいつらを先に！」

『そっちを頼む』

ジムから離れると、俺は機体走らせてMSに近づいて行く。

敵機に近づいて行くと、俺はビームライフルを取り出した。

ビームライフルを使って敵MSを倒していくと、遠くに戦艦が居る事に気づいた。

俺はMSを掃討すると、戦艦は宙域から離れて行く。

『各機回収後この宙域を離れます！』

艦長の大きな声が通信機から聞こえると、戦艦から撤退信号が出てくる。

よく見ると戦艦は最新鋭のものだった。

色は白色で、サラミス級とは全く違う形をしている。

船の中に入って行くと、俺は艦長に会いに行く。

艦長室に入ると、艦長室には艦長以外にもMS部隊の隊長がその場

にはいた。

「ジン・ライゴウです！」

「よろしくね。私はこの船の艦長をしているマリナ・ラスティーです」

「俺はこの船の隊長を務めているレムネーだ」

全員の自己紹介を終えると、艦長が俺に説明してくれた。

「申し訳ないわね。本来ならもう少し前に基地に付いているはずだったんだけど」

「それは良いんですが…」

「この宙域にはいったただけで3回はベア軍に襲われている。俺達は何

とか基地に向かったのだがな。」

「どこの部隊か分からないけど、ここまで襲い掛かってくるんです」

「これからどうするんですか？」

「これからは国連軍の指示に従って、戦場に向かいます」

「ここからサイド4でベア軍との戦闘が始まるつもりです。」

「私達は今からそこを目指します」

「途中で補給を受けるつもりだが、どのみち早めに到着するつもりだ」

一人と話しながら俺はこれからの事を考えていた。

俺は艦長室から出て行くと、船の中を見て回っている。

俺は艦長室を出て右周りに回って行くと、奥の方から何人者人たちが歩いてきた。

「お前が新しい人員って奴か？」

「はいージン・ライゴウですー！」

「私はセリア・モリと言います！この船の管制をしていますー！」

「俺はMSパイロットのグリーンだ！よろしくー！」

「私はファミアーです！彼と同じくMSパイロットをしていますー！」

「俺も同じくMSパイロットをしているジェンだー！」

セリアーと名乗った女性は背が少し小さく、おとなしそうな感じがする。

髪型はショートであり、どこか落ち着いた雰囲気がある。

グリーンと名乗った人物は屈強な男で、いかにも一般兵に似合っている感じがする。

ファミア と名乗った女性はセリア とは違って背の高いしつかりした女性だ。

胸もそこそこ大きい感じがする。

最後にジェンと名乗った男は、細身の余りパイロットには向いていな男性だった。

「お前が特務隊所属の新しい奴か…俺はてっきりゴツツイ奴が来るのかと」

「卒業したばかりなんですー！」

「へえ〜。じゃあ成績は優秀なんだ！」

「確かにさっきの戦闘も中々のものだったわね！」

「はい！僕もそう思います！」

「でも少し老け顔かもね！」

前からよく言われるのだが俺はどうも老け顔に見えるらしい。

リュウウからも良く老け顔だと言われた。

「でも頼れる奴で助かるよ！」

「よろしくね！」

「はい！」

そう言つと四人は通路の先に消えて行った。

俺はその先の通路を進んで行くと、エレベーターに乗ってブリッジを目指した。

ブリッジに上がると、操縦士と通信士が席に座っていた。

座席の配置は、艦長席と副艦長席が一番後ろに付いており、左右に通信士席とオペレーターがある。

一番前に操縦席が二つ用意されていた。

「誰だ!？」

「今回この船に配属になったMSパイロットのジンです！」

「君が！よろしくね！私は管制の一人で、マリーです！」

「俺は副操縦士のサガリだ！よろしくな！」

そう言つと俺はブリッジから出て行く。

エレベーターから再び降りると、俺は更に奥に進んで行く。

食堂の前に来ると、俺は中に入って行く。

食堂の奥から体が大きな人間が出てくると、俺に向かって叫んだ。

「誰!!ご飯はまだよ！」

「すみません！俺今回この船に配属になったジンです！」

「あんたが！私はここの料理長のメイリ　よ！料理の事は何でも言うてね！」

「はい！よろしくお願いします！」

そう言つと俺はさっさと食堂を出て行った。

なんかこれ以上「」に居ると、どこか危ないような感じがした。

「それにしてもとっても広いな」

そう言いながら俺は船の中を進んで行く。

俺は船内をくまなく調べると、自分の部屋を目指した。

しかし、そこで俺は自分の部屋がどこにあるのか分からなかった。

「ちつき聞いとけばよかったな」

俺は艦長室に急ぐと、ドアをゆっくり叩いた。

「ズンズン」

艦長の優しい声が聞こえてくる。

俺は部屋に入ると、艦長の前に立った。

「聞きたい事があるんですが？」

すると艦長室は何かの音楽が聞こえてくる。

「これって…へビメタ？」

「分かる？好きなのー！」

艦長の表情はどこか輝いていて、俺は直視できそうにない。

「それで？話があるんでしょ？」

「あ、そうだった。艦長、俺の部屋ってどこですか？」

「そう言えば説明を説明をしていなかったわね」

そう言つと艦長は部屋に誰かを呼んでいた。

少しすると艦長室の中に知らない女性が入って来た。

「なんででしょうか？」

「アリア。この人を部屋に案内してあげて」

「了解しました！」

そう言つと俺は艦長に一言礼を言つと、アリアと呼ばれていた人に付いて行った。

アリアと呼ばれていた人は終始黙り込んでいて、俺はどこか気まずさを感じた。

「アリアです」

「ありがとうございます」

「…なんですか？」

「嫌…なんでもないです」

「では」

そう言つとアリアさんは廊下の奥に消えて行つた。

自分の部屋のベットの所で横になっていると、警報が鳴つた。

俺はブリッチチからの大きな声が聞こえてくる。

『モビルスーツが6機！全員配置に付いて下さい！』

管制のマリーと言われていた女性の声で俺はそのまま部屋を出て行く。

ノーマルスーツに着替えると、他の隊員たちが来るのを待つた。

「良し！そろっているな!」

隊長の大きな声が響くと、俺は黙つて頷いた。

「敵はモビルスーツ6機で接近中だ！俺達は出撃次第敵機を撃墜だ！ジェンとファミア は船からの援護だ！残りは俺と共に敵機の撃破！以上!」

「……はっ……」

全員が大きな声で叫ぶと、俺達は格納庫に急いだ。

俺は真直ぐアクセルガンダムに乗り込むと、ガンダムを起動した。

先に隊長がカタパルトに乗って行く。

『レムネー！ジム！行くぞ！』

その後に俺がカタパルトに運ばれる。

『アクセルガンダムをカタパルトデッキに搬送します!』

カタパルトに運ばれると、ガンダムの足が固定される。

ビームライフルと盾を装備すると、マリーさんが大きな声で叫んだ。

『アクセルガンダム！発進どうぞ!』

俺は目の前に写っている星空を見ていると、発進態勢を作り叫んだ。

「アクセルガンダム！ジン！行きます!」